

憧れていた冷酷社長は

夜は私だけに甘々な旦那様でした

目次

憧れていた冷酷社長は
夜は私だけに甘々な旦那様でした

5

番外編

281

星野専務の結婚

FCの一号店

私達の次の予定

憧れていた冷酷社長は

夜は私だけに甘々な旦那様でした

プロローグ

私に触れるその手がとても優しく、まるで自分がガラス細工にでもなったようだ。耳元で囁かれる低くて甘い声。

肌にそっと息がかかる度、私の身体は過敏に反応して、次にどこに触れてくれるのかと期待してしまう。

彼の首に腕を回してしがみ付きながら、私はその手が身体中を静かに這うのを受け入れる。密着する肌は熱くて汗でしっとり潤っていた。

時折、無意識に漏れてしまう吐息が少し恥ずかしい。

その人は嬉しそうに笑ってから揶揄うように唇で唇を塞いでくる。

こんなに近くにいるのに、もっともっと思ってしまう私は強欲なんだろうか。

ずっと憧れていた人の手が自分の身体の奥深いところを触れてくる。

そんな現実的じゃない状況に頭がぼーっとする。

「乙葉、愛してる」

同じ言葉を何度も繰り返して、私に夢じゃないと伝えてくれる彼。

愛してると言う度に、耳たぶや頬へ彼の唇が優しく触れる。

こちらを見つめる熱を帯びた瞳を覗き込みながら、私は黙って頷き返した。

第一章 本社の混乱と逆ギレ人事

店外からも見えるガラス張りのメインディスプレイでは、今朝入荷したばかりのワンピースに、柔らかな素材のストールが肩から掛けられている。

澄ました顔のマネキンの腕にはA4ファイルも余裕で入るちよつと大きめのトートバッグが提げられていた。

オフイスでも着られるキレイめカジュアル。

それがアパレルブランド『アグライア』のコンセプトだ。

ギリシャ神話に登場する輝きの女神の名を掲げたその店の洋服は、合わせるアイテムによって幾通りにも着回せるから色違いで購入する客も多く、手頃な価格帯の商品がほとんどなのに客単価は割と高めなのが特長である。

さつき島什器に並べたばかりの新作カットソーも、ネイビーとブラウンの二色がすでに売り切れてしまった。

『副店長 菊池乙葉』のネームプレートを首から下げながら、私は店の中をぐるりと見回した。

大学を卒業してから五年、『アグライア』を展開するアパレル会社スターワイドに就職し、店舗

異動を二度経験した。だから、この北町モール店は三店目になる。

同期の半分は辞めてしまったけれど、残っている中では一番に副店長になったからなかなか頑張っている方だと思う。

ハンガーに掛かったままのブラウスを手に取り、キョロキョロと何かを探している女性客に気がき、私は歩み寄りながら笑顔で声を掛ける。

着丈短めニットにロングのフレアスカートを合わせた女性は休日のお買い物中だろうか。手には二つ隣のショップの紙袋を提げている。

「ご試着されますか？ ご案内させていただきますね」

フィッティングルームに誘導しながら、客から受け取ったブラウスのハンガーを外す。女性が靴を脱いで中へ入ったのを確認して静かにカーテンを閉めると、近くの棚から商品をかき集め、客が顔を出すのを待つて再び声を掛ける。

「サイズはいかがでしょう？」

「ええ、大丈夫だと思います」

「そのブラウス、裏地がしっかりしているので一枚でも着ていただけるんですが、ジャケットを羽織っても袖がもたつかないようにこだわってデザインされてるんですよ」

言いながらフィッティングルームから出てきた客に、用意していたジャケットを鏡の前で着せる。上着を重ねても余計な皺も出ないシルエットに、絶妙な袖丈。『アグライア』の商品は着回しやす

いと言ってもらえる理由だ。

「ジャケットはあまり着ることはないかな……」

「じゃあ、カーディガンでも合わせやすいですよ。これ、今日入荷したばかりなんです、割と長めの丈なんでブラウスもインせず羽織れちゃうんです」

ジャケットを脱がせて、代わりに薄手のVネックカーディガンを女性客の肩に掛けた。肌触りの良いニットのカーディガンは今季の一押し商品に指定されている。値段も手頃でカラー展開もかなり豊富でお薦めしなくても人気が出るはずだ。

案の定、女性客は他の色も見たいと試着したままカーディガンの棚を見に向かった。

試着したブラウスとカーディガン、そしてカーディガンの色違いも購入し、『アグライア』の店名入り紙袋を片手に帰っていく客を、私は店先で「ありがとうございました」と頭を下げて見送る。

「菊池さん、あのカーデ売ったの、あれで何枚目ですか!？」

バイトスタッフの岡本胡桃おかもとくるみが乱れたトップスの棚を整理しながら、呆れ顔を浮かべている。ショートヘアでややボーイッシュな胡桃はあまりスカートを穿かない。今日もワイドパンツにショート丈のライダースジャケットを合わせている。もちろん、着ている物は全て自社商品だ。

「えー、ちゃんと数えてないから分らないけど……十二、三枚かな？ たまたま色違いで何枚も買ってくださいの方が多かったから」

「だからって、十枚越えて……昨日入荷したばかりですよ、あれ」

「今季の強化商品だから、岡本さんも頑張って売ってね」

にこりと微笑ほほえんでからさつき接客していたフィッティングルームに戻り、私は放置したままだったハンガーを片付けて商品を元の棚へと戻していく。

整理が終わると、今売ったばかりの商品と同じ物をストックルームで探し出した。

今日みたいな平日で客足がそれほどでもなければ、すぐに補充できるから楽だ。忙しい日は翌日の開店前にやることになり、いろんな業務が滞ってしまいがちになる。

ストックを両手で抱えて店頭へ出ると、レジカウンターで外線電話を受けている店長の江藤紗耶えどうさや香から手招きされる。江藤店長は私より二つ年上で、この店は店長になって二店舗目のベテランだ。だから他店から問い合わせや相談の電話が掛かってくることも多い。

今の電話も他の店長からかと思っていたが、「では、失礼いたします」と丁寧に断っていたところを見るとそうじゃないみたいだった。同僚が相手なら「じゃあ、お疲れ様です」といつも軽く言っただけだ。

受話器を戻した後、江藤店長が私に向かって何だか微妙な表情になる。ご機嫌なだけと困惑したような、喜びと驚きがごちゃ混ぜになった顔。

私は店長からの呼び止めにどう反応していいか分からず、黙ってカウンターの中に入った。すると、江藤店長が少しもったいぶった口調で告げてくる。

「来月から私、エリアマネージャーになるみたい」

「えっ!？」

「ほら、店舗数が一気に増えてマネージャー二人では手が回らなくなったらしくて。今、部長から言われたところ」

「わ、おめでとうございます。それって店長と兼任ってわけじゃないですよ？　ってことは、うちには別の店長が異動してくるんですか？」

複数店舗を管理するエリアマネージャーに抜擢ばつてきされた江藤店長は、まだ管轄かんかつエリアは確定していないと言いながらも得意げだ。だって、マネージャーになれるのは店長としての実績が認められた証あかしなのだから。

私からの問いに、江藤店長はニヤニヤしながら首を横に振る。

「次の店長は菊池さん、あなただって。来週、本社での幹部面談があるから、それまでに決意表明の内容を考えておいてって」

「へっ!？」

「私が店長に就任した時の資料、今度持ってきてあげるから、それを参考にしたらいいよ」

「はあ」

あまりに急なことで私は間抜けな返事しかできなかった。

副店長になって二年、そろそろかなとは思っていたけれど、こんな急に店長へ昇格するとは考えてもみなかったのだから仕方ない。

店長昇格の話はまだ疑っていたけれど、夕方に本社から部長の名前で送られてきたメールにそれが本当だと実感する。メールには本社で行われる幹部面談の日時が指示されていた。

新たに店舗を任されることになった店長は本社で幹部を前に決意表明を行うのがスターワイドの習わしだ。決意表明では店長としてどんな店にしたいか、そしてそのためには具体的にどうするつもりなのかを発表するらしい。

「抽象的な言葉を並べて誤魔化そうとすると、真田まなだマネージャーあたりにガッツリ突っ込まれるからね」

「はあ」

「過去に『明るい売り場作り』って発表して、何をもって明るい売り場というのかって問い詰められて泣いた人いるらしいからねえ」

江藤店長の言葉に、私は確かにそうだと頷き返す。

明るい売り場なんて言われてもあまりに曖昧あいまい過ぎて、具体的に何をすればいいのか分からない。店長の時は清潔な売り場作りを目標にしたらしく、掃除のチェックリストを用意したと言っていた。

それで私は長年の疑問が解決した。

——ああ、掃除用具入れに貼ってるリストはそういうことだったんだ。

他の店では見たことがない掃除用チェックリストがこの店にだけあって、ずっと不思議に思っ

いた。あれは彼女が店長に就任した際に作ったものだっただ。

翌週火曜日の十一時より少し前。部長からのメールに従い、私はスターワイドの本社ビルに向かった。最寄り駅から徒歩十分、背の低いビルが乱立するエリアで、裏通りにはおしゃれな店と住宅とが立ち並ぶ。

五階建てのビルの一階半分は取引先向けのプレスルームになっていて、現行の自社商品がずらりと展示されている。天井までガラス張りだったから奥のテーブルでスーツ姿の男性二人が向かい合って商談中なのが前の通りからも見えた。

受付で名乗ってからエレベーターを待っていると、妙に騒々しい人達が上から下りてくる。焦った風にどこかへ確認の電話をしたり、ヒソヒソと人目を気にしながら話したり、すれ違う人達は皆なぜか急ぎ足で落ち着きがない。以前に本社を訪れた時はもつと静かで緊迫した雰囲気だったはずなのに、何だか様子が大きく違うように感じた。

「星野専務が……」

「マジか、この後どうなるんだよ……」

「デザイン部の後任は……」

ざわついている人達の声を気にしつつ、本社のことはよく分らないと私は首を傾げながら三階の第一会議室のドアを叩く。ザワザワした廊下側とは打って変わり、会議室は体感温度がマイナスに感じるほど凍り付いた空気が漂っていた。

幹部の座る長机に向かい合うようにぼつんと一脚だけ置かれた椅子。

そこへ座るよう指示されると、私は「北町モール店勤務の菊池乙葉と申します。よろしく願いいたします」と挨拶し、お辞儀してから着席した。

長机に五つ並んだ席の真ん中に及川社長、その右隣には常務、左隣には本来なら星野専務がいるはずなのになぜか空席で、両端をエリアマネージャーの真田さんと販売促進部の部長が陣取っていた。男性幹部ばかりを前に、私は緊張してごくりと息を呑む。

エリアマネージャー以外と対面するのは入社時以来で、私の顔をちらりと見た後に確認で手元の資料に目をやる人が多かった。

入社式の時はまだ二十代で若さの残っていた及川社長は、黒のスーツにシルバーのネクタイを締め、三十代半ばになって完全に仕事人間という感じに変わっていて眉間に皺を寄せた気難しい表情で資料に目を落としていた。

この部屋の空気をここまで凍らせているのはおそらく彼だ。鼻筋の通ったモデル張りの端正な顔立ちだから、そんな人を寄せ付けない雰囲気でも絵になってしまうのがちよつと腹立たしい。就活中、社長目当てで受けにきたという子に何人も会ったことを思い出す。

そういう私もこの社長に憧れてスターワイドを受けたクチだったけれど……

「では、決意表明からお願いたします」

進行役のエリアマネージャーから促され、私は席から立ち上がると持っていた資料を見ながらそ

れを読み上げていく。緊張から少しばかり声が震える。すぐ目の前にいる及川社長が真っ直ぐに自分を見ていると思うと頭が真っ白になりそうだった。

入社するずっと前から、彼は私の憧れであり目標の人だったから。

「私が店長に就任した晩には、より多くのお客様に再来店していただける店作りを目指します。具体的には、積極的に次回イベントのご案内、DMとショッピングカードの活用、商品のご予約とお取り置きのお勧めの強化。スタッフ間では新商品への勉強会も行いたいと考えております」

私の発表に最初に質問を返してきたのは江藤店長から聞いていた通り、真田マネージャーだった。「その勉強会は菊池さんが主体で？」

「はい。そのつもりです」

商品知識をアルバイトスタッフまで周知させることで接客レベルを上げていくと宣言すると及第点だったのか、それ以上突っ込まれなかった。思っていたよりも余裕だったと心の中でホッとしながら、そのまま椅子に腰を戻して幹部面談へと移行する。

店長昇格への面談は江藤店長から就活時と似た質問をされると聞いていたから、私は前もって想定される質疑の答えをちゃんと用意してきている。

こちらはとりあえず形だけで、決意表明ほど突っ込まれることはないらしい。事前に散々脅されていた割に、意外と簡単に乗り切れてしまいそうだ。

「では、菊池さんの入社理由を覚えておられますか？」

絶対来ると予想していた質問に、私は座ったまま背筋を伸ばして自信満々に答えを口にする。

「起業してから少し経った時、及川社長と星野専務がテレビで取り上げられているのを拝見しました。その友情と熱意に心を打たれ、自分も一緒に働いてみたいと思いました」

スターワイドは及川社長が大学の時に起業した会社だ。まだ高校生だった私はテレビで一瞬だけ映ったその小さなニュースに衝撃を受けた。中学と高校の同級生だった星野専務がデザインした服を売るために社長は大学で経営学を専攻し、学生ながらも実際に会社を起こしたのだ。

そんな熱い友情の元で誕生した『アグリシア』というブランドが気になって、私はその週末に電車を乗り継ぎ、一番近い店へと足を運んだ。

そして高校生の私にはちよつと大人っぽいとは感じたけれど、とても洗練された店舗と商品に完全に魅了された。いつか自分もここで働きたいと思い、実際に就職での第一志望をスターワイドに絞り込んだ。社長達と一緒に仕事がしたいという、その一心で。

私はこの会社への愛社精神をめいっばい盛り込んだ入社理由を伝えたつもりだった。

でも、目の前に横一列に並んだ幹部達の反応はお世辞にも良いとは言えない。隅の席の真田マネージャーに至っては「今、それを言うか……」と、なぜか頭を抱えてうなだれる。

冷え切っていた会議室の空気がさらに凍てついた気がした。

部長も常務も私からは目を逸らすように、とつくに終わったはずの決意表明の資料を見直すフリをしている。でも、中央に座っている及川社長だけが私をじつと見て、冷ややかに笑いながら言っ

た。低いけれどよく通る声で。

「なら、その愛社精神で『アグライア』に匹敵するものを新しく考えてみる」

社長の言った意味が分からず、私は目をぱちくりさせたまま固まる。

私はショップ店員で、デザイナーでもなければ企画部の人間でもない。

スターワイドの唯一のブランド『アグライア』の商品をお客様に販売することはできても、新しく何かを創造するなんてできない。

——私、今日は店長に昇格するための決意表明をしにきただけだよね……？

「えっと、あの……？」

クエスチョンマークを顔中に貼り付けながら、私は及川社長に向かつてどういう意味かと尋ね返す。何だかよくは分からないけれど、社長が私に対してものすごくお怒りになっているのだけは理解できた。

私の何が、彼の逆鱗げきりんに触れてしまったんだろう？

必死で考えてみてもさっぱり分からない。

他の幹部達を窺うかがつてみても、誰も私と目を合わせようとしない。

「君の店長昇格はなしだ。明日から企画部に配属だ」

そう言つて立ち上がり、机の上の資料はそのままにして、及川社長は一人で会議室を出ていってしまう。背後からはドアの閉められる音が強く響く。

面談を社長に途中放棄されて、残された私達はしばらく茫然ぼうぜんとする。予定されていた時間にはまだ余裕があつたはずなのに、最も重要な人がこの場からいなくなつてしまったのだ。

店長昇格の話が白紙に戻つたのは分かるが、明日から企画部とは一体どういうこと？

一番先に口を開いたのは常務だつた。創業二年目に他のアパレルメーカーから引き抜かれてスターワイドの経営陣に加わつたという渡瀬わたせ常務は、社長よりも遥はるかに年上で親子くらいの差はあるはずだ。その白髪はくの多い頭を片手で掻かきながら、常務は困つたような顔で笑つていた。

「菊池さんも間が悪過ぎたよね。今日、専務の名前出しちゃダメだよ。そりゃ、社長も怒つて当然だ」

「え、どうしてですか？」

「星野専務が新しく別の会社を立ち上げて独立するつて言つて、さっき辞めたところなんだよ」

ハアと大きな溜め息をつきながら、渡瀬常務は机の上の書類をまとめて立ち上がる。社長不在では続ける意味がないと判断したらしい。「じゃあ、俺も戻るわ」と部長達に片手を上げて告げると、社長と同じように会議室を出ていった。

私は常務が言つた言葉を頭の中で反すうする。星野専務が独立するために退職？

——え、嘘うそでしょう!? 星野専務が辞めちゃつた後に、あの入社理由はダメに決まつてるし……社長達の友情物語が崩壊した直後にあれはマズかつた。神経を逆撫なでされた社長が怒つても当然だ。私は自分の間の悪さに頭を抱えた。

まさかそんなことになっているなんて思いもよらなかった……。否、専務の席に誰もいないからって、そんなことを誰が想像できたろうか。私は自分の不運を嘆くしかできない。

社内ですれ違った人達があんなに騒いでいた理由がようやく理解できた。

本社は今、とてつもなく大変なことになっていたのだ。『アグライア』のメインデザイナーでもある星野専務が退職するなんて危機的状况も甚だしい。

今現在、シヨップで取り扱っている商品の半分近くが専務のデザインだと聞いている。

『アグライア』イコール星野篤人^{あつひと}で、それが今後なくなるとなればスターワイドはどうなってしまうんだろうか？

——だから、『アグライア』に匹敵するものを新しく考えろってこと？ いやいや、私に何ができるのよ……

「まあ、菊池さんは知らなかったんだから仕方ない。しかし、代わりの北町モールの店長はどうしましょうか？ やっぱ、江藤さんのマネージャーの話はなしにするしかないですよねえ。近場の店に適任者もおりませんし」

真田マネージャーが机の端に座る小金井部長^{こがねい}へと声を掛けると、部長は困ったように眉を寄せながら苦笑いしている。シヨップの人事の決定権は部長にあるのかもしれないが、一切現場には顔を出さない彼が判断できるはずもない。小金井部長はちよつと投げやり気味に薄笑いで真田マネージャーへと告げる。

「しばらくは人事を大きく触るのは控えておいた方が良さそうだな」

「そうですね、専務が今後どうされるのかも読めないですし……ああ、でも菊池さんは明日から本社勤務ね、社長命令だから」

企画部は二階にあるからね、と真田マネージャーが同情的な眼^めをしながら私を見る。

部長も呆れ笑いを浮かべながら、「これから企画部に説明してくるわ」と席を立った。

あまりにも急なことに、受け入れる側もきつとバタバタしてしまうはずだ。

——そりゃあ、最終的には本社で働けたらって思ってたけど、こんな急に……

シヨップで実績を積んで、いずれは真田マネージャーのように本社に身を置くのが目標ではあった。

それは決して、社長の怒りを買って無理矢理に配属されるなんてことじゃない。

——大体、私が企画部で何ができていうんだろう……？ 『アグライア』に匹敵するものって何？ 全く新しいブランドを一から立ち上げるってこと？

私はもう一度頭を抱え直してから、深い溜め息を吐いた。

翌朝、本社の始業時間より少し早めに出社した私は、慣れない場所と慣れないスーツ姿に顔を強^{こわ}張^ばらせていた。仕事という自社ブランドの服を着るばかりだった私が、二日連続で他社製のスーツに袖を通すなんて就活の時代以来だ。

二階の企画部の部屋を覗くと、壁面にはスチール棚が並び、床はいつぱいの段ボールで埋め尽くされていた。

中には見覚えのあるポスターなどの販促物があり、ここは広報も兼ねている部署なのだと一目で分かる。

入り口近くにいた出社したばかりの黒スーツの男性に声を掛けると、一番奥のデスクでノートパソコンに向かって三十代半ばっぽい女性が上司だと言われ、挨拶をしに向かう。

「ああ、菊池さんだっけ？ 小金井部長から聞いて一応席は作っておいたんだけど……」

企画部の課長だという古沢^{ふるさわ}さんは、挨拶を終えると溜め息混じりに私をデスクへと案内してくれた。入り口近くのさっきの男性の真向かいの席らしい。

古沢課長はキャリアアウーマンを絵に描いたような雰囲気で、ダークグレーのパンツスーツに髪をアップにしていた。挨拶をしてもにこりともしてくれず、私の存在を面倒だと思っているのが思いつき顔に出ている。

でも少しスーツが体型に合っていない、この人ならもう少しワイド目のパンツの方が似合うのになんて思いつつ、私は得意の作り笑顔を浮かべながら礼を言う。

「もう聞いていると思うけど、星野専務が辞めて今後の企画の大半が流れてしまったから、ここは当面の間、その穴埋め業務がメインのつもりでいてくれる？」

「……はい」

「ああ、でも、あなたには社長直々に指示が出るのよね？ あとではかの子達に説明してあげて。うちだけじゃなく、デザイン部からも人を集めてもらわないといけないわね……」

古沢課長はまた深い溜め息を吐いてみせる。「しかし、あなたも間抜けよねえ」と鼻で笑っているところを見ると、昨日会議室で起こったことは全て聞いているのだろう。

「ま、この先どうなるんだろうって皆で心配してたところだから、できることをやるしかないわよね」

星野専務の退任騒動は昨日の朝一に起こったのだと聞いている。まだショッパの方には話は漏れていないみたいだけれど、本社はかなりパニック状態^{おかし}に陥^{おち}っているようだった。

その後に出社してきた人達のほとんどが不安を隠せない暗い表情だったのは、この会社が『アグライア』というブランド一本でやってきていたからだ。

「今季の商品はいいとして、来季からどうするんだろうな……残ってるデザイナーだけでやっていくのか？」

「星野専務が独立した先で似たような物を発表したら……」

「新会社に好待遇での引き抜きを持ち掛けられた奴がいるって聞いたけど、誰か知ってるか？」

たった一晩であることないことがすでに噂^{うわさ}として回っているようで、互いに聞いた情報を確認し合っている。スターワイドは主要デザイナーである星野篤人に依存しすぎていたことが露呈^{あき}したも同然で、社内には早くも転職を考え始める者が出ているようだった。

私が企画部の人達を前に挨拶をしている間も、後ろの方ではヒソヒソと今後のことを話し合っている声が聞こえた。

このタイミングでは新人なんて歓迎してられないのも当然だ。けれど、割と真剣に聞いてくれている人の方が多いのは、私が及川社長自らの指示で配属されたと知っているからなのだろう。期待されているというよりは、お手並み拝見という冷やかな視線の方が圧倒的だったけれど。

——だからって、私に何ができて言うんだろう……

あれは絶対に逆ギレに近い辞令でしかない。シヨップでの販売経験のみの私が、本社の企画部でできることなんて何もない。古沢課長によつて指名された二人と一緒に第三会議室へと移動しながら、私は手の平に爪が食い込むほど両手をギュッと握りしめる。

昨夜、江藤店長からスマホに電話がかかってきた。閉店時間はとくに過ぎていたけれどまだシヨップにいるという店長は時折鼻をすすっているのが分かった。

シヨッピングモールの明かりが落とされ、店の照明だけが点いた陸の孤島のような空間で一人残って電話する彼女の姿は簡単に想像できる。

彼女の下で働いていた二年という年月を私はそこまで短いとは思っていない。

「さつき、真田さんから電話があつてね、私が来月からマネージャーになるって話も、菊池さんの店長昇格もなしになつたって……」

あんなに嬉しそうにしていたのを知っているから、私は「はい」という短い返事しかできな

かった。

「なんかさ、本社がごたつてゐるからマネージャー職の増員はしばらくしないことになつたんだって」

「はい」

「でもさ、なのになんで菊池さんが本社勤務になるわけ？」

「いや、私も何でだか……」

「ねえ、何かおかしくない？ 本来、本社勤務になるのは私の方じゃないの？ あなた、面談で何を言つたの？ 私の評価が下がるようなこと、言つたんじゃないのっ!？」

はじめは静かな口調で話していたはずが、江藤店長の語気は徐々に大きく強くなつていった。昇格の話が二人同時に立ち消えるのなら納得できるのに、私の方は企画部への配属替えになつたことが許せないのだ。どういう流れでこんなことになつたのかまでは知らないらしく、店長は私が彼女の悪口を幹部に吹き込んだからだと考えているようだった。

「あの、私は何も……」

「私、菊池さんのこと結構評価してあげてたつもりだったけど、とんだ見当違いだったみたいねっ!」

プチッと一方的に切られた通話に、私は言い訳する猶予も与えてはもらえなかった。店長の涙交じりの鼻声を思い出しながら歩いていると、目的の場所に着いたようだ。

企画部と同じ二階フロアにある第三会議室は、昨日面談をした第一会議室の四分の一ほどの広さしかないらしい。おそらくは部署内でのちょっとしたミーティング用の部屋なのだろう。

本社ビルの会議室の中では一番小さいのだと説明してくれたのは、朝一で上司が誰かを教えてくれた男性、宮前さんだ。

先陣を切って歩く宮前さんの後を、私ともう一人の女性社員の森口さんが追いかける。

「デザイン部からも三名出してくれるみたいなんで、全部で六人のチームってわけですか」

「私、同期がデザインにいるんですけど、うちと違って向こうは新ブランドの立ち上げに携われるって妙に張り切ってるらしいですよ」

企画部からは宮前さんと一緒に森口さんが課長から指名されたいけれど、二人は部署内では明らかに若手で、女課長が私に全く期待してないことだけは十分に分かった。完全な寄せ集めのメンバーだ。本来の部の仕事に影響の少ない社員が体よく面倒ごとを押し付けられた図で、二人にとってこの配属異動は貴い事故のようなものに違いない。

でも、会議室についてドアを開き、私達は森口さんが言った通りにデザイン部の今回の企画に対する本気度を嫌でも目の当たりにして圧倒された。

六畳ほどの広さに八脚の椅子が並ぶ長方形の長机。横並びに座って待っていた三人はそれぞれがノートパソコンやタブレットと一緒に分厚いファイルやスケッチブックを机上にずらりと並べ、私達の到着を待ち構えていた。

「お疲れ様です。デザイン部の松下と柏原と横田です。一応、それぞれが自己アピール用に何点か持ってきているんで、さっと目を通してもらえますか？」

一番奥の席に座っていた松下さんという男性が、隣に座っている女性二人を指差しながら紹介してくれる。この中で見るからに最年長の彼はデザイン部の係長のネームプレートに首に下げていた。スリ姿の企画部に対し、デザイナーの三人は服装規定が緩いのかオフィスカジュアルというか、ゴスロリ風まで紛れ込んでいる。さすがに一瞬、目を疑った。

「横田はまだ入社二年目で経験は浅いですが、今朝の部内コンペで勝ち上がるだけの实力は備えています」

「部内コンペ？」

提示されたタブレットやスケッチブックには各自が直近で描いたというデザイン画が並ぶ。それを私達は覗き込みつつ、松下係長の言葉を首を傾げながら聞き直す。

「ええ、新ブランド立ち上げに参加するための選抜コンペを始業前に行ったんです。で、それに勝ち抜いたのが私達です。ですが、私のことはまとめ役的な感じに考えていただければ……なんせ、自分はこの二人に圧倒的に差を付けられての三位だったもので」

そう係長は謙遜したが、見せてもらったデザインは長いスターワイド勤務によって星野専務の影響を強く受けているような印象だった。このデザインの服が店に入荷しても何の疑問も湧かずに店頭へ並べるだろう。

一方まだ入社年数の若い二人は『アグライア』のコンセプトとは全く違い、柏原さんはかなりかつちりしたキャリア系なデザインで、反対に横田さんは本人の着ている服もフェミニンを通り越してゴスロリに近く、見せてもらったデザイン画もフリルやリボンが要所に盛り込まれている。

既存ブランドではこれまで活かせなかった彼女達の持ち味が溢れている。

「また両極端ですね……」

言葉少な目だった森口さんが左隣でボソッと呟くのが聞こえる。

私も苦笑いしながら頷き返し、反対側の宮前さんへと意見を求めるように視線を向ける。企画部メンバーの中では彼が一番入社歴が長いから、どうしても頼ってしまうのは仕方ない。

「ええっと、まずは現状把握が大事だと思うんで、既存ブランド『アグライア』について簡単に分析していくのが先かと。で、それに対抗できるものを俺達で生み出すのがこのチームへの最終的な課題なのでは」

その意見に沿ってそれぞれが既存ブランドについて話し合う。

オフィスでも着られるキレイめカジュアル、というのが今のブランドコンセプトだけれど、実際の購入層はどうだろうという話題になると、皆の視線が一斉に私へと集まってくる。

この中で実際の現場を知っているのはどうやら私だけらしい。

「そうですね、やっぱりお勤めされてる方が一番多いとは思いますが、学生さんやお子さん連れのお客様もいらつしやいましたし、意外と幅広いんじゃないかなと思います。こないだまで勤務し

ていた店の常連さんには、七十代のおばちゃんもいらつしやいましたし」

「七十代、ですか!? その年代の方は何を買っていかれるんですか?」

「え、普通ですよ。ボトムはサイズ直しが必要だったりするんで、主にトップスでしたけど」

背の低い方だったから丈を詰めなければならないボトムはほとんど購入されなかった。でもカッターソーやカーディガン、ストールなどの雑貨類など一通りは販売した記憶がある。

そう伝えると特に男性陣が驚いた顔をしていたが、歳を取ったからといって誰しもがシニア向け商品を好むとは限らない。若い世代向けの店で自分も着られそうなアイテムを探す方は結構いる。

「おしやれに年齢は関係ありませんし、うちの商品は流行には左右されにくいですしね」

「まあ、それはそうですが……そう考えると、やっぱり星野さんは凄かったんだなって思いますね」

松下係長がしみじみと言葉を漏らす。おそらく彼は年齢的に社長や元専務と同年代だから、それなりに思うことがあるのだろう。

私達にとつて『アグライア』というブランドはとても大きな存在になっていて、それに匹敵するものを新しく考えるという課題に、どこから手を付けていいのかすら見当もつかない。

かといって、及川社長からの具体的な追加指示なんて何もない。

下手したら私を異動させたことも忘れてるんじゃないかと思えてしまう。

だって明らかに逆ギレのように指示して去って行ったのだから。

それでもこうやって他の人達まで巻き込んでしまっているのだし、やるべきことをやるしかない。
「新しいブランドをどう位置付けるかを決めることには……」

既存ブランドとは真逆のコンセプトにするか、それとも派生ブランド的な立ち位置にするか。それすら決めかね、私達は頭を抱えた。

「そもそも、星野専務がいなくなつて今後の『アグライア』自体が読めない状態ですが、その辺りはどうなんですか？」

宮前さんの問いかけに、松下係長がデザイン部の状況を説明し始める。

代わりのデザイナーがいらないのであれば『アグライア』は終わりだ。その辺りは当事者である彼らの方がよく分かっているはずだ。

「まあ、実際のところ星野さん中心にやってはいましたが、全てというわけではないので。残っているデザイナーの負担は大きいですが、現状維持は可能だと思います」

「なら、代わりのブランドというよりは、並行して展開するつもりで考えた方が良さそうですね」
主要デザイナーの退任でブランドがなくなるという最悪の状況にはならなそうで、私はホッと胸を撫で下ろした。『アグライア』が消えたらショップはどうなってしまうのかと心配していたけれど、係長の説明通りなら現場への影響は少なそうだ。

ほんの数日前まで販売する側だったから、私は本社の内情よりもそっちが気になってしまう。
だからもし今、新しいブランドの商品が生まれたらと思うと、やっぱり気になるのは売り場での

展開形態のこと。

「ターゲット層が似通っていて派生ブランド的な位置付けだと、既存店でのコーナー展開は可能なんですよ……」

私がぼそつと呟くと、森口さんも思い当たる節があるのか大きく頷いて同意してくれる。

「ああ、よくありますよね。姉妹ブランドの商品と一緒に並べるのとか。それだったら実際の反応を見ながら、少しずつ商品数を増やしていけばいいかも」

「ああ、全く別物になつてしまうと、商品だけでなく箱物も用意しないといけないか……」

この小規模なチームでは店舗から作るというのは難しいし、実現するには年単位での準備とそれ相応の資本が必要なはずだ。きつとそんな大がかりなことを社長も期待してはいないだろう。だって咄嗟の思いつきのような指示だったから。

なら、このチームで考えるべきなのは『アグライア』の姉妹ブランド的な存在なのだろう。

「ということは、ターゲット層は大人の女性。既存はお勤めされている方が中心でしたけど、そこは変更なし？ そうすると似たような商品群になる可能性が高いですよ……」

議事録的に意見をまとめながら松下係長が新たな議題を投げかけてくる。

私はこれまで接客した顧客を頭に描きながら、あの人達にさらにお勧めできそうな商品について考えてみる。

——『アグライア』がオフィスカジュアルってことは、仕事のある日に来てもらう服。なら、そ

れ以外の日は……？」

「休日に着る洋服。仕事の時は着られないリラックスウェアか、あるいは逆に気合いを入れる時の勝負服？ ああ、でも、子育て中のママが気兼ねなく公園で走り回れるようなスニーカーに合わせるアイテムもありか……」

私はブツブツと呟きながら手帳の空きページに走り書きしていく。接客中にお客様達はどんな時に着る服を探し求めているだろうか。もちろん、通勤時に着る服を探している人は多かったけれど、それ以外だって少なくはなかった。ほどよくきちんと感があるから子供関連の園や学校行事にも適しているし、合わせる物によつては気軽に普段から着てもらえる。

——そういえば、お取り置きをお願いされた佐山様さやまが『部屋着はちょっとコンビニに行けるくらいの楽ちんカジュアルが理想』っておっしゃってたなあ。

接客時の雑談を思い出し、それも手帳に書き足していく。勝負服になると価格帯が『アグライア』とは大きく離れてしまうだろうが、休日ファッションならいいかもしれない。うんうん頷きながら走り書きした単語の羅列を眺め、私は自分に集まっている視線に気付いて慌てて顔を上げる。

「え、な、何ですか!？」

会議室内の全員の眼が私の方に向いていた。

両隣に座っている企画部の二人は私の手元にある手帳を覗き込み、驚いた顔をする。

「菊池さん、それもうちよつと詳しくお願いしていいですか？」

「え、何を……？」

「その、楽ちんカジュアルつてやつです。それが『アグライア』の店に置いてあった場合、菊池さんなら売れると思いますか？」

私が手帳に走り書きした『楽ちんカジュアル』の文字を指差しながら、宮前さんが真剣な顔で聞いている。それには私は自信満々で頷き返した。

「物によつては、既存の商品とのコーディネート提案して一緒に売ることも可能だと思います」

「抱き合わせてことですか？」

「はい、『アグライア』の強みは着回しが効くことなので。逆にフォーマルドレスとかだと扱ったことがないので困ってしまいますけど」

ちよつとしたワンピース程度ならいいが、フォーマルとなると知識には自信がない。素材だけでなく着ていくシーンに対するマナーなど、今の私ではお客様に質問されてもまともに答えられない。きつと他のショッpstaffだって同じような人は多いだろう。そうなつてくると、店に置いてあつても売れるとは思えない。下手したらスタッフから敬遠されて店頭へ出してもらえないかもしれない。

私の答えに、会議室内の全員が大きく頷いていた。

「ブランドコンセプトが決まりましたね。楽ちんカジュアル、です」

新しいブランドのコンセプトが決まり、デザイン部の三人が目を輝かせる。

彼らがデザインを起こしやすいようにと私達はさらに具体的なターゲット層を絞り込んでいく。楽ちんカジュアルといっても、リラックススウェアからアウトドアウェアまで幅広い。どこまでを対象とするかを決めるのだ。

「客層はそのままとなると、アウトドアではないな。部屋着までいくと既存商品とのコーデ幅は狭まるだろうし……」

「なら、スニーカーに合う休日ファッション。さつき菊池さんがおっしゃっていた、子育て中のママが子供と一緒に公園遊びできるっていうの、私はいいいと思います」

森口さんはそう言いながら会議室内を見回した。

このメンバーで既婚者は係長だけで、他は独身ばかり。松下係長は奥さんが妊娠中らしいが、まだ生まれてないから子育て経験のある人がここには誰もいない。

「まあでも、そこまで具体的に絞らなければならないと思うので……」

最終的にスニーカーに合う休日ファッションという案に落ち着くと、そこから私達のチームは一気に動き始めた。

オンタイムの『アグライア』に対して、新しいブランドはオフタイムを狙っていく。通勤にはカジュアル過ぎて向かないが、休みの日に気軽に着られる服がコンセプト。

ブランド名はいろいろともめまくった挙句に虹の女神の名前から『イリス』に決まった。イリスもアグライア同様、ギリシャ神話に出てくる女神の一人だ。

具体的な企画を書類にまとめ、それを課長に提出できたのは本社勤務になって二週間ほどが経過してからだ。ショップの時の同期達にも相談したりして、実際に『アグライア』のどのくらいのお客様がアイテムを普段使いする前提に購入されているかをリサーチするのに時間がかかってしまった。

「ふうん、まあいいんじゃないの。じゃあ、及川社長のところへ直接提出してくれる？」

宮前さんと一緒に緊張しながら出した企画書とサンプルデザインに目を通した後、古沢課長が確認の判を押しながらあっさりと言ってくる。最終的に決定するのは社長かもしれないが、まさか直接持つていけと指示されるとは思ってもみず、私達は絶句する。

「あなた達がそれなりのものを出してきたら、社長のところへ持つていくように言われてるのよ。酷評されて書き直しを要求されるかもしれないけど、一応持つていってみたら」

辛辣で投げやり気味な課長の言葉に、私は宮前さんと顔を見合わせる。

どうやら私達は社長の直属のような位置付けらしい。忘れかけていたけれど、そう言えば私の及川社長からの評価は最悪だった。元が怒りに任せた腹いせのような辞令だったから、散々練った企画がこれ見よがしにボツにされる可能性は高い。

「何だか申し訳ないので、私一人で行きますね……」

チームの人達が待つ第三会議室へ戻りがてら、私は社長室へは一人で乗り込もうと決める。面談の時のようにまた社長の逆鱗に触れてしまうかもしれないし、他の人を必要以上に巻き込みたくは

ない。ギリギリまで一緒に行くと言い張ってくれた宮前さんも、過去に及川社長から目を付けられ、退職に迫いやられた人の話を松下係長から聞いて怖じ気づいていた。

ビルの最上階にある社長室の前に、私は肩で深呼吸する。

チームで意見を出し合って、デザイナーの三人にもたたくさんのサンプル案を出してもらった。

でも、及川社長からまともに取り合ってもらえる保証なんて何もない。最悪の場合、企画書を見もせずに投げ返されるのがオチかも……

勇気を振り絞ってドアを叩き、中から返事が聞こえるのを待つ。

内側からガチャリと開いたドアから常務が少し渋い表情で出てくる。私の顔を見て一瞬だけ固まったように見えたのは、すぐに誰だか思い出せなかったのだろう。

私と入れ違いで出ていく常務は去り際に部屋の奥へ向かって「こちらも早急に手を打たないと——」と溜め息混じりに言いながら立ち去っていった。

開いたままのドアの隙間から中を覗き込み、私は「失礼します」と声を掛ける。返事は聞こえなかったけれど、恐る恐るとドアを押し開いた。

第三会議室よりも広さのある空間に幅広のデスクと応接ソファ、そして壁一面の棚には書類の入ったたくさんファイルが並んでいる。まるで資料室のようなそこでデスクに向かつて書類に目を通していたのは二週間ぶりに顔を合わせる及川社長だ。上着を脱いだベストスーツ姿にやや緩められた深青色のネクタイで、細い黒フレームの眼鏡の奥の瞳は少し疲労感が浮かんでいるように見

えた。

「企画部の菊池です。企画書は直接社長に目を通していただけると承ったのですが……」

及川社長はデスクから顔を上げて、ドアの横で固まっている私へとちらりと視線を送ってくる。そして、ふうっと溜め息に似た息を吐いてから、椅子に座ったまま手を伸ばす仕草をする。ここまでは持つてこいつてことだろうか？

私はもう一度「失礼します」と言いながら、部屋の中へと足を踏み入れる。カーペット敷きの社長室は歩いてヒールの音が鳴らない。そっと近付いて社長の手の上を持ってきた資料を乗せた。すると、デスクの前で突っ立ったままの私に向かって及川社長は呆れ顔をしながら顎でソファの方を指し示す。

——座って待つてろ、ってこと？ ちゃんと口で言うてくればいいのに……

意地でも言葉を発するつもりがないのか、ここに来てまだ一度も彼の声を聞いていない。私のことがよっぽどお気に召さないらしい。

息を呑む音まで響きそうなほど静かな社長室で、私はソファの隅っこに座ってずっと俯うつむいていた。及川社長が時折資料をめくっては、ペンで何かを書き込んだり線を引いたりしている音を聞きながら怯おびえて待つ。

資料の最後のページがめくられた後、ここに来て初めて社長が私の名前を呼んだ。彼が私の名前をちゃんと憶おぼえていることに密かに驚いた。

「菊池、このチェックした箇所はもつと詳しく詰める。あと、松下の代わりに別のデザイナーを入れた方がいい。あいつのデザインは『アグラライア』を抜け切れていない」

返却された資料を受け取るために、私は慌ててソファから立ち上がる。そしてデスクへ駆け寄り、社長の手で添削が入った企画書に目を落とす。この短時間でこれでもかというほど赤ペンが入られている。そして、松下係長のデザイン案には大きくバツ印が付けられていた。

「必要な部署に確認して、最短どのくらいで市場に出せるかを報告しろ。それと、棚一つ使うつもりならそれに見合う商品数を揃えろ、これでは少なすぎるだろ」

添付した残りのデザイン案を見返してからそれもこちらへ押し付け返してくる。

たくさんの指示を一気に出されたが、私は肝心なことを改めて確かめる。

「あの……それは『イーリス』を作っていいってことでしょうか？」

おずおずと聞き返した私の顔を見上げ、及川社長はなぜかいまましいとでも言いたげな表情をする。

企画を認めるのがそんなに嫌なんだろうか？　なのに最短で市場に出す？

そう思っただけで困惑する私に対し、及川社長がデスクの引き出しから折り畳まれたA4のコピー用紙を取り出した。それはどこかのネットショップのトップページをプリントアウトしたものであった。

レディースアパレル『ルネール』オープン記念セール、という大きなバナーを掲げたECサイト^{電子商取引}。

大手のネットサイトの中にあるショップだというのは表示されているURLで分かる。印刷画質が良くなかったから商品の詳細はいまいちよく見えないが、ターゲットにする客層は『アグラライア』に近そうだとは思った。

でもこれがどうしたんだろうと私が社長の顔を窺うと、及川社長は呆れたように告げた。

「星野が新しく立ち上げたブランドだ」

「えっ、専務はつい先日退職されたばかりでは……!？」

このECサイトは二日前にオープンしたと聞き、私は驚いて目を瞬^{またた}かせる。

たった半月足らずで商品化し販売できるわけがないから、元専務がスターワイドを退職する前から水面下で動いていたと丸分かりだ。彼は一体いつからここを出ていくつもりでいたのだろうか？

「専門学校時代の後輩と手を組んだらしいが、どの商品もうちの物と間違われてもおかしくない」
完全に一致というわけではないが、どこか見覚えのある商品ばかりだと及川社長が眉を寄せる。それは星野専務のデザインだから当然だけど、EC独特の価格の安さに客が流れないとは言いい切れない。

「こちらはいくつの影響を受けていない新ブランドで、差別化していくしかない」

つまり、考えていた以上に私達の企画は期待されているということ。

それを知って書類を持つ手がかすかに震える。たとえ企画が通らなかったとしても、本社を追いつめられてまたショップに戻るだけだどこもお気楽に考えていた。

だけど、そんな覚悟のないまま軽い気持ちで取り組んでいた企画を、社長の目は社運を託せるかどうかを判断すべき対象として見てくれていたのだ。

急に圧し掛かってきたプレッシャーに、私はよろよろとよろけながら企画チームの待つ第三会議室へと戻った。

「菊池さん、ど、ど、どうでした……?」

社長から突き返された添削入り企画書を抱え込んだ顔色の悪い私に、森口さんと横田さんが駆け寄ってくる。柏原さんは人数分のコーヒーを淹れたカップを盆に載せ、ちょうど給湯室から運んで来てくれたところだった。

松下係長は別件で出ているらしく不在だったが、最後まで一緒に行くと言い張ってくれた宮前さんは私の顔色を見て最悪のことを想像したらしく、オロオロしながら机の上を片付け始める。

これでチーム解散とでも思ったんだろうか。

私は受け取ったコーヒーを一口飲んで落ち着いてから、会議室内の同僚達を見回した。

「えっと企画内容はおおむねオツケーみたいなんですが……」

言いながら、持って帰ってきた企画書を長机の上に広げる。

皆はそれを覗き込み、社長からの修正指示を確認していく。赤の入った箇所の多さに皆驚いているようだった。ただ、そのことは大した問題じゃない。私はどうしたものかとデザイナーの二人の顔を交互に見る。

「社長から、松下係長は外して別のデザイナーさんに入ってもらおうよう、言われたんですが……」

社長によって大きなバツ印を付けられた係長のデザイン案を見た後、私の言葉に柏原さんと横田さんが互いに目を合わせる。二人とも部内では若手の立場だから、上司である係長にそのことを伝えるのは難しいはずだ。これはやっぱり直接指示を受けた私が宣告すべきなんだろう。

私だっけついにないだ本社に來たばかりの下新人なんだけれど……

壁に設置された時計を見上げ、係長が戻ってくる時間を確かめる。正直、とても気が重い。

と、猫舌なのかコーヒーに息を吹きかけて必死で冷まそうとしていた宮前さんが、カップを持たない方の手を小さく挙げた。

「あ、俺、今日は係長と飲みに行く約束してるんで、その時に言いたいですか?」

「いいんですか!」

「ああ、多分大丈夫です。あの、ここから外される自覚があるみたいなこと、こないだも言ってたんで」

わりとあっさり宮前さんが言うから私達は呆氣に取られた。

「何なら、菊池さんも一緒に行きます?」

「い、いえ、遠慮しておきます……」

「そうですか」と再びコーヒーに息を吹きかけている彼の感じから、係長の離脱は何でもないことに思えてくる。よく分からないけど、そういうものなのだろうか?

最年長で役職付きだからチームのまとめ役を任せていた係長がいなくなるのはもちろん困る。でもデザイナーとして参加してもらって、その力が発揮されていないと本人が気付いているなら黙って見送るしかない。柏原さん達はヒソヒソと代わりに誰が来るのかと予想し合っていた。

翌日から松下係長の代わりに『イーリス』発足に携わることになったのは、森口さんの同期だという木島さんだった。彼は例のコンペではそこまで順位は高くなかったらしいが、ブランドコンセプトが合っているだろうと松下係長が推してくれたらしい。

企画から離れても係長が変わらず協力的なことに内心ホッとする。

「こう見えて二児のパパなんですよね、木島君って」

「そうなんです。専門の時に出来婚したんで、上の子は来年小学生です」

森口さんと同期ということは私とも同じ歳だ。

でも、明るい髪色とかなりルーズな服装のせいか随分若く見える。

「えーっ、そんな大きいお子さんがいる風には見えないですう」なんて接客中のお世辞として定番だけれど、彼に対しては素で言える。

さらに奥さんが三人目を妊娠していると聞いて、私は思わず絶句した。自分ももうそんな歳になったのかと思うと無性に焦りを感じる。ここ数年、婚活どころか恋愛すらまともにしていない。別に仕事に生きていたわけじゃないけど、いつの間にか二十代後半に突入していた。

木島さんのノリが軽めだからか、ここでは最年少の横田さんが最近によく発言してくれるようになった。実は係長の時には少し委縮している感じだったのが気になっていた。

でも歳の近い男性同士、うまくいきそうだと思った宮前さんが意外とそうでもなかったようで、ことあるごとに意見が合わずにぶつかっていた。

「今は係長みたいな分かりやすいまとめ役がいらないから仕方ないですよ」

ミーティングの合間にお手洗いで一緒になった柏原さんが呆れ顔を浮かべながらも冷静に口にする。彼女は普段は物静かだけど、意外とズバツと核心を突く発言が多い。

「でも無気力な人と仕事するより全然いいです。こないだまでの星野専務が、本当にやる気なくて酷かったんで……」

「そ、そうなんですか？」

「ええ、電話したりパソコン触ったりしてるからお忙しいんだなって思ってたら、納期ギリギリになって自分の持ち分を他の人へ押し付けたりとかザラでしたね。きつと、新会社の設立準備を優先してたんだあって今になって分かりましたけど」

柏原さんは星野専務に憧れてスターワイドに入ったと言っていたから、退職前の専務の様子にかなりショックを受けているようだった。

鏡の前で手際よくメイク直しを済ませる彼女の横顔を盗み見ながら、私は手首に付けていたシュシュで髪を首後ろでキュッとまとめる。

会議室へ戻れば、残っていたメンバーが木島さんのスマホを囲んで何やら騒いでいた。

私と柏原さんも一緒になって覗き込んでみると、木島さんが画面をスクロールしながら説明してくれる。

「係長からちよつと話聞いてたんで、こないだ子供達と遊びに行った公園で知り合いに撮らせてもらったんですよ。一応、会社の人にも見せるかもしれないし顔は写さないって条件で」

言いながら見せてくれたのは公園遊び中らしき若いママ達の写真。ベビーカーを押しながら子供を抱っこしてなどポーズはいろいろだったけれど、みんな木島さんや奥さんの子供繋がり（つな）の友達なんだそうだ。年齢は二十代後半から三十代というところだろうか。自社ブランドの客層と同じくらいだ。

「まあ、足元はスニーカーかローヒールが基本ですね。チビを追っかけて走ることも多いし、砂場にも入ったりするから。ヒールなんて履いたら砂にめり込んで身動き取れなくなるのがオチです。でもパンツばかりつてわけじゃないですよ、みんなそれなりにお洒落（しゃれ）して公園に来てるんで」

「ああ、親同士の交流があるって言いますもんね。公園デビューでしたっけ？」

「そうそう、どこの幼稚園がいいとか、習い事は何がいいとか、ある種の情報交換の場だからさ。ふらつと家着なんかで行ったら誰からも相手されないすね」

どうやら私達が席を外している間に宮前さんと子育て中の母親のスカートの是非（ぜいひ）を言い争っていたらしい。

森口さんに耳打ちされて私は「ああ」と納得して頷き返す。

木島さんの具体的で説得力ある意見に、宮前さんは少し悔しそうにしながらも固定観念にとらわれていたと素直に反省しているようだった。

さらに、それを近くで静かに見守っていたはずの横田さんが何かをひらめいたとばかりにタブレットにペンを走らせ始める。木島さんの写真フォルダにデザインのヒントを見つけたみたいだ。

この寄せ集めのようなメンバーで構成された私達のチームは『イーリス』という新しい可能性に向かって、着実に動き出した。

ただ、やはり以前の星野専務のような絶対的カリスマのいない新設の企画室には、確固たる指針というものが無い。デザイナー達が必死でアイデアを捻（ひね）り出している横で、私達企画部のメンバーは市場調査や資料によって掻き集めたデータから『イーリス』のブランドコンセプトをさらに固めていく。社長からの直接指示は一切なく、とにかく全てが手探り状態だった。

特に苦戦を強いられていたのは、これまで上司の指示に従って仕事することの多かった若手デザイナーの二人かもしれない。

後から合流した木島さんのペンの動きの方が滑らかなのは、松下係長の推薦通りに彼が元から『イーリス』のコンセプトに合っていたからだろう。それに木島さんは私達の中で一番ターゲット層に近いところにいるから、具体的にイメージが湧きやすいものもある。

でも、柏原さんと横田さんだって部内コンペで勝ち上がった実力者。ただ、傍（そば）で見ていると

その意気込みが少し空回りしているように感じて心配になる。

「ハア……なんか違うんですねえ」

描いたばかりのデザイン画を遠目に眺めたり、角度を変えたりして確認した後、柏原さんが大きな溜め息を吐き出す。

給湯室から戻ってきた森口さんからコーヒーを受け取った後、そのまま完全に動きを止めている。両手でカップを包み込んだままの体勢で硬直している柏原さんの視線は机の上に置かれたタブレットに固定されていた。朝に出勤してから彼女が席を立つのを見たのはお手洗いに立った一回きりな気がする。昼以外はずっと集中して机と向き合うタイプらしい。

反対に、横田さんはB5サイズの大きな手帳を大事そうに抱えて、「ちよつとプレスルームに行ってきます」とミーティングが終わればそそくさと部屋を出ていくことが珍しくない。その前も飲み物を買うと言って席を立っていたし、会議室内にいても既存商品のサンプルを机の上に広げたりと常に動き回っている印象だ。

「横田さんはアイデアが降りてきた後は早いんですね。一気に描き上げる感じで」

そう他人事ひとじとのように木島さんが企画部の私達へ説明してくれる。彼はこの企画室よりも慣れたデザイン部の方が落ち着くとかで頻繁に向こうにあるデスクに戻って作業しているようだった。

「人によっていろいろなんですな……」

「まあ、そうですね。自宅の方が効率がいいとかでほとんど顔見せない人もいますし」

そう言われてみれば、たまに用があつてデザイン部を訪ねてもあまり人がいないことがある。クリエティブな人達はそれぞれに発想のための何かこだわりみたいなものがあるのだろう。

そのこだわりの強さが裏目に出てしまった結果なのだろうか。私がランチを外で食べてから戻ってきた時、女性デザイナー二人が激しく言い合う姿を目撃する。

「だから私は確認したいことがあつた時にいないのは困るって言ってるんです」

「でも同じところでジツとしても頭回らないので」

「必要な資料まで持っていなくてもいいでしょ、探してたこっちの身にもなってるよ」

話を聞くと、どうやら横田さんが資料のファイルを持って部屋を出ていたのが原因らしい。本人は休憩時間だから問題ないと判断したようだったが、お弁当持参で資料に目を通しながらお昼にしようと思っていた柏原さんは、肝心のファイルが棚に無くて部屋中を探し回ったのだという。

「スマホは持ってますし、別に社外に出てるわけでもないじゃないですか」

「でも横田さん、電話しても一度で出てくれたことありますか？」

「それはすみません。集中してたり、周りに人がいると気付かないことも多くて」

先輩でもある柏原さんの方が優勢みたいで、横田さんはしゅんと肩を落として謝罪していた。その素直な反応に柏原さんもそれ以上は怒るに怒れず、呆れ顔をしている。

「だから居場所を固定してもらうか、定期的に戻ってきてもらわないと」

気分によって移動する横田さんに対し、柏原さん的には物を申したいようだ。

それに対し、横田さんが「でもですわね」と反論する。
「柏原さん、めっちゃくちや溜め息つくじゃないですか。あれ、隣で聞いてたらプレッシャーなんですよ」

意を決したというように主張する後輩へ、柏原さんが驚いて目を丸くする。確かに彼女は思考中の溜め息が多い。それは私も気付いていたけれど、横田さんはずっと気になっていたらしい。

以前の広い部屋ではそんな風に思ってたかったみたいだが、この第三会議室は狭い。長机を共有しての作業では互いの衣擦きふすれだって嫌でも耳に届く。

何も浮かばず悩んでいる時に、隣は最終確認に入っていると焦りを感じるのも当然。特に彼女達は真逆のデザインを得意とするから、自分だけ何も進まないのはここでの存在意義を否定されたような気分になるのだという。

その横田さんの言葉に、柏原さんも少し躊躇ためらいがちに言い返す。

「……プレッシャーなんてそんなの、私だって感じてるわよ」

「え？」

冷静で物静かな印象だった柏原さんの弱気な言葉に、私と森口さんも顔を上げる。彼女は与えられた仕事を飄々ひょうたうとこなすタイプだとずっと思っていた。

「何を描いてもありきたりに思えてしまうし、係長みたいにいつダメ出しされて戻されるかも分からないし……」

「それ、分かります！」

横田さんが柏原さんに対して大きく頷いて同意する。社長命令で入れ替えを言い渡されてデザイン部へ戻ってしまった松下係長。二人は次に何か失敗したら自分も企画から外されるんじゃないかと不安に思っていたのだという。

ここ最近、二人に対し感じていたことの理由がようやく分かった。

彼女らが焦って空回りしている原因は係長が使い捨てられたように思えたからだ。

「大丈夫ですよ。松下さんが外されたのは、『アグライア』との差別化が難しそうだったからですから」

既存ブランドの影響を受け過ぎている。それが彼が新ブランドの企画から降ろされた理由だ。

デザインへのダメ出しは出来が悪かったからじゃなく、あまりにも『アグライア』の色が濃過ぎたからだ。

皆なんとなく気付いているものだと思っていたし、現に森口さんも「そうよね」と納得した顔をしている。確か係長本人にも自覚があったからあっさり戻っていったはずだ。

けれど柏原さん達はそんなことだとは思っていなかったみたいで、露骨にホッとした表情に変わった。成果が出なければ簡単に切り捨てられる、そんな無慈悲なチームだと思われていたのは寂しいけれど。